

グラビア	地域を支える人 藤縄光留さん・神奈川県	1
発掘！地域の希望のタネ	岩手県西和賀町〈西わらび〉	5
給食のじかん	〈芋煮〉 島根県津和野町	山本 徹 6
書評	速水融 著『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』 菅原敏夫	8
京都ALS患者囑託殺人を受けて		
焦点	① まず生きられる環境の整備を	嶋守恵之 10
	② 悲しくて衝撃的な事件	岡部宏生 12

特集 **コロナ禍の在日・滞日外国人**

コロナ禍もとの外国人労働者——労働相談の現場から	指宿昭一	18
立ちほだかる言語の障壁 ——医療通訳の制度化と健康格差の是正に向けて	沢田貴志	26
コロナ禍の歓楽街で働く外国人親子を支える ——Minami こども教室の取り組み	原めぐみ	32
コロナを機につながる外国人と地域コミュニティ ——安芸高田市国際交流協会の取り組み	明木一悦	38
コロナ禍における外国人「県民」を支援する ——ぐんま外国人総合相談ワンストップセンターの対応	三輪浩章	45
学生がつくる情報発信サイト「COVID-19 多言語支援プロジェクト」の取り組み	石井 暢	52

自治研チャレンジサポート活動		
『美馬市職員になったら読む本』製作プロジェクト	長岡裕己	57
医療通訳者全国集会の開催	村松紀子	60
「コロナから介護崩壊を防ごう!プロジェクト」の 取り組み 滋賀県本部	工藤博司	62
『月刊自治研』を読む(第五季)①『月刊自治研』の 誌面構成が育むもの	篠田 徹	64

自治研センターの機関誌案内	71
次号予告・編集部から	72

各県自治研  
活動レポート  
連載



『日本を襲ったスペイン・インフル  
エンザ』人類とウィルスの第二次世界戦争  
藤原書店 四二〇〇円+税

速水融 著

スペイン・インフルエンザ一九一八

本欄は書評の対象を新刊と決めているわけではない。しかし新しいテーマを優先するので、ほとんどは新刊になる。今回は例外的に以前の出版だ。二〇〇六年二月刊(現在も容易に入手できることを確認)。著者は著名な人口学者・歴史経済学者。二〇一九年九〇歳で亡くなられた。さて、一月号の特集にあわせて、コロナ禍と私たちの困難に的を絞って新刊



書を探してきたが、事がらが現在進行中過ぎて、評価が定まらない。信頼の置ける書物を探していたら、一〇〇年も前のインフルエンザ禍に行き着いた。「スペイン風邪」としてご存知かもしれない。忘れられた歴史

一九一八(大正七)年から一九九年にかけての(たぶん)鳥インフルエンザの世界的大流行について、日本語で書かれたほとんど唯一の書物だ。

日本の近代史研究としては忘れられていたが、スペイン風邪という言葉は知られている。この言葉は広辞苑にもある(「スペイン」の項目の中に、スペイン内戦とかと並んで)。岩波の近代日本総合年表にもほんの少し記述がある。ところがこの権威ある年表にしてから、国内の死者数、流行の時期について大幅な誤りがある。忘れられた歴史なのだ。そして政治も対策も忘れられていた。

本書の特徴は徹底的な地方紙の探索に

ある。巻末に引用新聞社のリストがあるが壮观だ。本文中の図版のかかなりの部分は当時の新聞のフォトコピーである。軍隊の日報、県庁の報告書、当時の日本植民地の情報など得がたい資料にも触れられているが、骨格は地方紙によってもたらされた記事のコピーである。

「マスクとうがひ」  
書評子のパソコンにはほぼ毎日(どうして登録したか忘れたけど)愛媛新聞の速報が届く。このところ内容は「医師の要請で〇〇件PCR検査をした。すべて陰性だった」という決り文句だ。地方紙は関心を持って取材している。一〇〇年後の歴史研究の基礎が今作られている。

一九一八年のインフルエンザは、第一次世界大戦戦死者の数倍の死者を出した。戦争よりも人口変動に影響を与えた。表紙は「マスクとうがひ」という標語のポスター。対策は今と変わらない。

評者 菅原敏夫 本誌編集委員